

私を育てた
あの時代、あの出会い

第15回

生徒に寄り添い、信じる大切さを 学んだ初任校での日々

高知県 高知市立城東中学校校長 田中敏彦 TANAKA TOSHIIKO

教師は日々、さまざまな働き掛けの中で生徒を育てる。そして教師は、共に働く仲間との出会いの中で育っていく。出会いから学んだ教育の原点、そして次代を担う若い世代に伝えたい不易を、田中校長が語る。

生徒の表面的な姿ではなく
その背景を知ることが大切

私の教師としての原点は、中学時代の経験にあります。ソフトボール部の顧問で、冬は駅伝部の顧問もされていた石川和先生は、授業も部活も一生懸命な先生でした。生徒がケガをしないようにと、練習前には一人ですフトボールのグラウンド整備をされていました。生徒に親身に寄り添うのが当たり前という先生で、生徒が主役で教師は黒子というスタンスでした。これが、私の目指す教師像の原型となっています。

しかし、実際に教師となり、その理想を体現する難しさを、私は初任校でまざまざと感じました。その学校は荒れの状態にあり、それが長く続いていたため、生徒の問題行動が常態化し、教師のどんな言葉も生徒の心に届かなくなっていたのです。そうした中、赴任されたのが中尾良孝校長です。先生はまず「生徒に寄り添いなさい。だまされ、裏切られても、生徒を信頼してください。生徒の問題行動だけを見るのではなく、その理由を探るために、常日頃から生徒と接することが大切なのです」と言われました。その言葉に私



たなか・としひこ 専門教科は社会科。高知市立一宮中学校、高知市立三里中学校、高知市教育委員会指導主事、高知県教育委員会学校教育課指導主事、高知市立三里中学校校長などを経て、現職。

1977 (昭和52)
高知市立一宮中学校
に新採で赴任。
赴任6年めに
中尾良孝校長が着任

1988 (昭和63)
高知市教育研究所
研修主事に着任

1990 (平成2)
高知市立三里中学校
に赴任

1994 (平成6)
高知市教育委員会
指導主事に着任

1997 (平成9)
高知県教育委員会
学校教育課
指導主事に着任

1999 (平成11)
高知県教育委員会
学校教育課
義務教育指導班長
に昇任

2002 (平成14)
高知県教育委員会
学校教育課課長補佐
に昇任

2003 (平成15)
高知市立三里中学校
に校長として赴任

2004 (平成16)
高知市立城東中学校
に赴任

「どんな生徒の心にも火をつけ、 興味・関心・意欲を引き出す」



は中学時代を思い出し、昼休みは生徒と遊び、放課後は部活動と一緒に汗を流し、休日には生徒がいそうな場所に足を運びました。そうして、学校以外の生徒の姿を知ろうとしたのです。

中尾校長は、そんな私に生徒会担当を命じました。私は、教師主導ではなく生徒会が中心となって学校改善を進めること、それを定着させて学校の伝統にすることを目指しました。クラスや学校を1つの社会と捉

え、この社会で起る生徒の問題は、生徒が主体となって考え、解決していく。教師は生徒の活動を黒子となって応援するというスタンスです。これは、中学時代の恩師、石川先生から学んだことです。

毎土曜日、生徒会役員と昼食を食べながら、今週の反省と次週の方針を話し合いました。生徒会の中に徐々にリーダーが育ち、主体的に考えて行動できるようになりました。県外研修で視察した中学校を見習っ

て、生徒会活動の進め方も変えました。年間目標と学期目標を立て、学期末に振り返り、次学期の目標と計画を立てるサイクルにしたのです。更に、年度ごとの活動を冊子にまとめることで、活動を「見える化」し、積み上げる構造にしました。

全校集会の進行も生徒会に任せました。私語が聞こえたら教室前の整列からやり直すというルールで、しつこいくらい、根気強くやり続けました。うまくいかなくても、すぐに解決策を指示せず、生徒の問題として生徒に返して考えさせました。

中尾校長の赴任から3年が経った頃には、新任教師でも授業が成立するほど、学校は落ち着きました。

生徒が変わると信じて 努力するのが教師の使命

それから数十年を経て、本校に校長として着任した時、学校は初任校と同じような状況でした。しかし私は、時間は掛かって、この荒れの状態から必ず立ち直ることが出来ると信じていました。教師全員で生徒たちと向き合った結果、5年後に荒れは収まり、学校は落ち着きました。生徒指導の負荷が軽くなってか

ら、学力向上にも取り組んでいます。家庭での学習が難しい生徒が多いので、放課後と長期休業中は毎日、自習室を設けています。校内にも勉強できる環境を設け、「勉強することが当たり前」という雰囲気づくりをしています。

最近、「城東中が変わった」。問題行動が起きなくなった」とうれしい声を耳にするようになりました。でも、荒れが収まり、問題が起きなくなったからといって、良い教育が出来るには限りません。教師と生徒との間に信頼関係が構築できて初めて、良い教育が成り立ちます。

どんな生徒でも学習し、成長したいと願っています。「あの生徒は学習意欲がない」と教師が諦めてはいけません。どんな生徒の心にも火をつけ、興味・関心・意欲を引き出すのが教師の役割です。生徒は、筋道立てて分かりやすく教えてもらうことを望んでいます。時間を掛けて学べば、理解できる生徒は多いのです。生徒に親身に対応することが、生徒を変え、学校を変える。どんな時も生徒に寄り添い、生徒を信じる大切さをこれからも伝えていきたいと思えます。